

**『幼小連携・接続推進リーダー活用事業』を活用した
円滑な幼保小連携・接続に係る実践
登別市立登別小学校 学級数8 (校長 古瀬 達郎)**

I はじめに

令和元年度(2019年度)より「幼小連携・接続推進リーダー活用事業」、「幼児教育と小学校教育の円滑化モデル事業」の指定を受け、幼小連携・接続推進リーダーが中心(以下、推進リーダー)となり、本校と連携校はもとより、市内全域の幼児教育施設と小学校との円滑な連携・接続を目指し実践している。

II 実践の概要

1 幼小の連携強化(相互理解)

- (1) 推進リーダーが校内ミニ研修を実施した。
 - ・テーマ:「円滑な学校間接続に向けて」
 - ・講師:幼児教育施設園長、所長
 - ・ねらい:近隣幼児教育施設の取組を知り、児童の指導に生かすとともに連携強化を図った。
- (2) 推進リーダーが幼児教育に係る研修に参加した。
- (3) 推進リーダーが「幼保小連携・接続通信」を市内小・中学校へ配信し、「10の姿」等について共通理解を図った。

2 学校間の相互参観・交流活動の促進

- (1) 1学期、幼児教育施設の教諭等が新入学児童の様子を参観した。
- (2) 2学期、幼児教育施設の教諭等が小学校の校内研究会に参加し、授業参観、事後協議、生活科等での交流を実施した。
- (3) 3学期、1日体験入学において児童と幼児が交流した。



【事後協議の様子】

3 引継ぎの充実

- (1) 登別市幼保小中連携協議会による合同引継ぎ会を行った。(令和元年度は新型コロナウイルス感染症対策のため中止)
- (2) 小学校の教諭が幼児理解のため保育参観を行った。
- (3) 小学校の教諭が幼児教育施設を訪問し、幼児教育施設の教諭等と引継ぎを行った。

4 行政と連携した教職員研修の充実

登別市幼保小中連携協議会実務担当者合同研修会において、小学校の教諭と幼児教育施設の教諭等がスタートカリキュラムのグループワークを行い、このことを踏まえ、市内の全小学校でスタートカリキュラムを作成し今年度より実施している。



【合同研修会の様子】

III 成果(○)と課題(●)

- 幼小連携・接続に関する小学校の教諭の意識が向上した。
- 小学校と幼児教育施設が交流する機会が増えた。
- 市内の全小学校において、作成したスタートカリキュラムを効果的に実施することができた。
- 市内の小学校の教諭がスタートカリキュラムの内容等について十分理解していないことから、校内研修等で理解を深める必要がある。
- 研修を充実させるために、小学校の教諭と幼児教育施設の教諭等との交流の方法を工夫する必要がある。

【幼小連携強化のポイント】

- 小学校において、幼児教育施設の教育・保育、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を知ることで、幼児が小学校入学までに身に付けた力を踏まえた指導計画を適切に立てたり、実際の指導に生かしたりすることができるようにする。
- 授業公開と研究協議では、小学校で児童が身に付けた力について幼児教育施設の教諭等に理解を深めることで、幼小の教育課程の円滑な接続につなげることができるようにする。

【児童と幼児の交流の質を高めるポイント】

- 「事前・交流を通じた体験・事後のつながり」を大切に計画することで、幼児が小学生児童への憧れや期待をもったり、児童が幼児を教え導く経験から自分の成長を感じたりすることができるようにする。

【段階的な引継ぎのポイント】

- 1回目(年度末)
 - ・登別市幼保小中連携協議会合同引継ぎ会において、幼児教育施設の教諭等と小学校の教諭等による幼稚園要録、保育要録(10の姿)を基にした引継ぎをできるようにする。
- 2回目(1学期の早い時期)
 - ・授業参観日等を活用し、幼児教育施設の教諭等が児童の様子を参観し、小学校の学級担任と児童への対応の具体等について検討することができるようにする。
- 3回目以降(随時)
 - ・小学校の教諭が保育参観をし、年長児の実態を把握したり、幼児教育施設の幼児観や指導観を理解したりすることができるようにする。


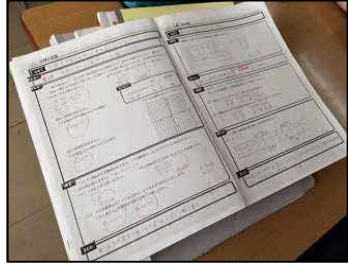

小・中学校間の円滑な接続と相互の取組の共有を図る実践

函館市立神山小学校 学級数 14 (校長 三浦 務)

I 実践テーマの趣旨

小・中学校間の接続において、進学前の乗り入れ授業や体験入学を実施していたが、今年度は近隣中学校教員による研修や、中学校区の広域コミュニティ・スクールの活動を生かし、さらなる円滑な接続と相互の取組の共有を進めている。

II 実践の概要

取組とねらい	詳 細
<p>1 算数・数学を中心とした授業参観 「学習過程や指導方法等を交流し、双方の授業改善を図る。」</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">【中学校の授業参観の様子】 【ノートの比較】</p>
<p>2 生徒指導の円滑な接続 「中学校における開発的・予防的生徒指導の研修を踏まえ、小学校における生徒指導に生かす。」</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>基本的生活習慣の指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆挨拶、言葉遣い ☆時間(守る、うまく使う) ☆身だしなみ(服装・髪型など) <p style="text-align: right;">} 習慣化させるための指導 いつでも、どこでも、何度でも、みんなで、組織で共通行動</p> <p>徹底して教え込む → 意識しながらできる → 意識しなくてもできる(習慣化)</p> <p>基本的行動様式とは</p> <p>基本的生活習慣を身につけた上で、自己指導能力を発揮した行動の仕方 できるようになる → 社会に出ても通用する</p> </div> <p style="text-align: center;">【中学校の研修資料の一部】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己指導能力の育成を目指した生徒指導の実践例を研修 <div style="text-align: right;">  <p>【中学校の研修を基にした掲示物】</p> </div>
<p>3 中学校進学に向けた期待をもたせる取組 「中学校教員への質問等を通して、進学に向けた心構えをもたせる。」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>第6学年児童の期待や不安、質問をアンケートで集計して中学校へ伝え、後日中学校の教員から回答していただく。</p> </div>	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">もうすぐ中学生</p> <p style="text-align: center;">6年生組 21 名</p> <p>め 中学校生活をイメージすることで、自分に必要なことは何かを考える。</p> <p>1 中学校になることについての心配(不安)と楽しみがどちらが大きいですか</p> <p style="text-align: center;">楽しみ</p> <p>2 どんな心配や楽しみがありますか、具体的に書いて下さい。</p> <p>新しい友達 毛すかい勉強 体育 リュックを登下校 制服 体育祭や文化祭 目的のしみの友達をつくる 3 中学校生活について知っていることはありますが、どんなイメージがありますか。 少しあれている。部活がない。体育館がある</p> <p>4 中学校生活について、知りたいことを書いて下さい。</p> <p>制服でスボンズカートを 部活を増やすことはできないのか 男女選べるようにできないのか なぜチャリ通はためないのか</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>Q「宿題はありますか。」 A「教科によって違いますが、あります。そして必ず提出を求めます。内容も大事ですが、とにかく提出して自分のやるべきことを果たす態度や取組が大事です。」 Q「部活に入らなくてもいいですか。」 A「自由参加です。」</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">【実際のアンケート】 【中学校教員からの回答】</p>
<p>4 不登校児童生徒への支援に向けた小・中学校の連携 「一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない支援を推進する。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 中学校区の広域コミュニティ・スクール(中学校1校、小学校2校)の児童生徒理解支援シートの共有を図る。 ねらいや支援方法、連携機関についての情報共有と引継ぎの充実を図る。

III 実践の成果(○)と課題(●)

- 小・中学校9年間で目指す子ども像の共通理解を図ることで、小学校段階、中学校段階それぞれで児童生徒に身に付けさせる資質・能力を明確化し、教育活動に結び付けることができた。
- 中学校進学に向けた期待をもたせる取組により、第6学年児童の不安が軽減されるとともに、進学に向けた期待や意欲の向上につながった。
- 本実践を継続可能な取組とするため、今年度の取組に改善を加え、次年度の小・中学校の教育課程に位置付けるとともに、分掌の役割を明確にする必要がある。

学校種間の円滑な接続を図る連携教育の工夫について

愛別町立愛別小学校 学級数 11 (5) (校長 長嶋 義和)

I 実践テーマの趣旨

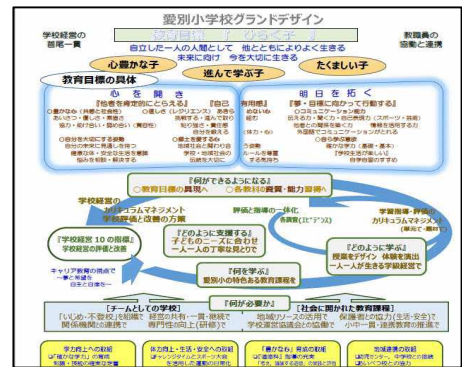
本校の児童は総じて素直で真面目であり、毎日、明るく学校生活を過ごしている。しかし、各種調査から、情報を読み取ってまとめたり、根拠を基に説明したりする力に課題が見られる。本校を卒業した中学生にも同様の傾向が見られたことや新学習指導要領の全面実施を機に、小学校と中学校が連携した学校経営構想のもと、計画的に学校間の円滑な接続を推進し、教育活動の充実に向けた取組を実施した。

II 実践の概要

愛別町では、学校運営協議会制度や小中連携・一貫教育など時代のニーズに応える総合的な教育策定のため、第11次愛別町振興計画の構想に則し、幼・小・中・養護学校において、愛別町連携教育推進委員会を柱に、学校間の円滑な接続・協力を推進している。

1 小・中学校のグランド・デザインの統一による教育課程の構築

小・中学校のグランド・デザインを統一し、未来を生きる本町の児童生徒に「生きる力」を育む教育課程を構築してきた。小・中学校では、学校・地域社会の特質を活かした「一人ひとりの成長を丁寧に見とる」指導の充実に努めている。特に今年度は、主体的・対話的で深い学びに焦点を当て「どのように学ぶか」の授業デザインを小・中学校で協議し、スタンダードとして位置付け実践を進めている。また、本校を会場に愛別町教育研究大会を開催し、道徳科の授業を公開するとともに、授業後に、小・中学校の教諭が研究協議を行い、それぞれの学校の実態交流や共通理解を図った。



小・中学校で統一したグランド・デザイン

2 連携教育推進委員会の活用による学校間の円滑な接続・協力

小中連携・一貫教育の目的等を再確認し、これまでの実践の成果と課題を共通理解するとともに、学校間の円滑な協力体制の構築を行った。特に英語教育では小学校外国語科と中学校外国語科の連携を明確にし、中学校教員による乗り入れ授業の充実を図ることができた。

3 地域学校協働本部との連携

愛別町地域学校協働本部を基盤としたコミュニティ・スクールの機能を活用し、保護者、各関係機関と連携して児童生徒を育む協働体制づくり（チームとしての学校）や、地域リソースを活用する協力体制づくり（開かれた教育課程）を進めた。特に、地域学校協働活動本部事業によるボランティアの推進を図っている。

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 小・中学校ともに、「目指す資質・能力」を明確にしたことにより、教育活動における目指す資質・能力を具現化した実践を構築することができた。
- 授業スタンダードとしての「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点を共通理解することができた。
- 連携教育推進委員会を柱とした乗り入れ授業や交流授業の位置付けが明確となり、取組の推進を図ることができた。
- 地域学校協働活動本部事業によるボランティア活動を具体化することができ、町内の各団体からの賛同を得て参加者が増加した。
- 学校評価の充実に向け、経営の評価と改善を進めるとともに、年度の重点目標や分掌業務の重点、児童の実態や保護者の思いを関連させて評価する必要がある。
- 授業デザインをスタンダードとしてより充実させていくために、「主体的・対話的で深い学び」を軸にした、児童生徒の言語活動を一層充実させる必要がある。
- 「分かる授業」の実践と情報活用能力の育成を図るため、GIGAスクール構想に基づき、ICT環境を整備し、これらを適切に活用した学習活動の充実を図る必要がある。

小・中学校、地域が連携した教育活動の充実に向けた取組

稚内市立稚内中学校 学級数5 (校長 小林 清一)

1 実践のポイント

(1) 各学校の授業改善に向けた取組

- 教員の資質・能力の向上に向けた合同研究会の実施
- 小・中学校の情報交流を踏まえた教育課程の改善

(2) 地域との連携による教育活動の推進に向けた取組

- 関係機関等との情報共有の取組
- 地域の教育力を高める取組

2 実践の内容

(1) 各学校の授業改善に向けた取組

○ 教員の資質能力の向上に向けた合同研究会の実施

稚内市北地区の稚内中央小学校と稚内中学校では、共通の研究主題を設定し、年間複数回の授業交流や研究協議を合同で実施している。この取組により各教員が教科の専門性を高めるとともに、各学校において義務教育9年間の学習内容の系統性を踏まえた指導計画の見直しや授業における指導の充実を図っている。



○ 小・中学校の情報交流を踏まえた教育課程の改善

月1回の管理職による情報交流会や、年間複数回の分掌担当者による交流などを通して、授業改善に向けた取組はもとより、児童生徒の実態の交流や各学校の教育課程の内容の等の確認を行っている。また、情報交流によって明らかになった課題の解決に向けて、教育課程の改善や中学校教員による小学校への乗り入れ授業の実施、学校行事の連携などの取組を推進している。



【「合同研究会」の様子】

(2) 地域との連携による教育活動の推進に向けた取組

○ 関係機関等との情報共有の取組

各学校の教員が、地域の関係団体の協議会等に参加し、情報交流や各種取組の連携を図っている。特に北地区の小・中学校、幼稚園、保育園、民生児童委員等の関係者で構成する「北地区子ども支援ネットワーク」では、学校や地域での児童生徒の現状や課題について交流を行うとともに、課題解決に向けて地域との連携や組織的な取組の観点から支援の方策について協議を行っている。

○ 地域の教育力を高める取組

小・中学校の教員が地域の教育力を高めることを目的とした「北地区子育て連絡協議会」に参加し、学校、地域、家庭の連携の充実を図っている。「北地区子育て連絡協議会」では、北地区の幼保小中の年間行事予定や地域の子育てに係る取組内容を掲載した「北地区子育てふれあいカレンダー」を作成し、学校と地域で情報の共有化を図るとともに、学校行事には地域住民が協力し、地域行事には学校等の関係者が参加するなど、相互連携により地域の教育力を高めている。



【「北地区子育てカレンダー」での情報発信】

3 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 児童生徒に係る情報共有を軸に、校種間や地域との連携の取組を推進したことにより、学校と地域との交流が充実するとともに、地域全体の教育力の向上につながっている。
- 義務教育学校の開設を見据え、これまで実施してきた小中連携の取組について、小中一貫教育で効果的に活用する方法等の検討を行う必要がある。

小中一貫教育の取組

岩内町立岩内第一中学校 学級数7 (校長 田中孝二)

I 実践の趣旨

本校では、令和2年度からの3年間、北海道教育委員会による「小中一貫教育サポート事業」の指定を受け、令和7年度に開校予定の施設一体型義務教育学校の設立に向けた取組を推進している。

今年度は指定事業の1年目として、第一に、町内4校共通で設定した目指す子どもの姿「ふるさと岩内を愛し、志たかく夢の実現に向かう」の実現に向けた取組を進めること、第二に、算数科、理科、外国語科の3教科で、中学校教員による系統性を意識した小学校への乗り入れ指導の充実を図ることを重点として取り組むこととした。

II 実践の概要

1 4校での学習規律等の統一

本町で目指す子どもの姿の実現に向け、教育課程の編成を進めると同時に、各学校で統一した指導を行う前提として、学習規律等を整備することが重要である。

このため、岩内町教育研究所が、各学校で学習を進めるため「学習規律の基本を見直そう」という資料を作成し、教職員はもとより、児童生徒・保護者で共通理解を図る取組を始めた。

学習準備	<input type="checkbox"/> 授業が始まる前に席に座りましょう。 <input type="checkbox"/> はじめと終わりのあいさつをきちんとしましょう。 <input type="checkbox"/> 正しい姿勢で学習しましょう。
授業中	<input type="checkbox"/> 【話すとき】聞く人の方に体を向け、顔を見て話しましょう。 <input type="checkbox"/> 【聞くとき】話している人の方に体を向け、顔を見て聞きましょう。 <input type="checkbox"/> 授業が終わったら、次の授業の準備をしてから休憩しましょう。 <input type="checkbox"/> 机の上には、授業に必要なものだけ置くようにしましょう。
家庭	<input type="checkbox"/> 持ち物は前日に準備をしましょう。 <input type="checkbox"/> 家庭学習は、 学年×10分(小学校) ・ 学年(7~9年)×10分+10分(中学校) を目安に取り組みましょう。 <input type="checkbox"/> 宿題は必ず行いましょう。

【岩内町小中学校「学習規律の基本を見直そう」】

2 中学校教員による小学校への乗り入れ指導における教科の系統性等の明確化

(小・中学校ともに、教科書は教育出版。今年度は10項目程度で)

算数科・数学科における9年間を見通した学習指導のため、特に小学校高学年と中学校第1学年の指導において課題の見られる単元の系統性を示した「Connect 30」(今年度は10項目程度で作成。3年間で30項目を整理する予定)を作成した。

外国語科においては、小学校での学習が、実際のコミュニケーションで活用されることを児童が実感できるよう、地域の特徴や行事等と関連させた表現集「英語表現30」を作成中である。これを活用し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を意識した学習を行い、中学校でのより高度な学習につなげていく。

No.	単元	小学校の指導で、指導方法の工夫が必要な内容	単元	中学校の指導で、指導方法の工夫が必要な内容	キーワード
1	ひたし 分数の 算算	【5年】123分 ☆10 計算 $\frac{2}{3} + \frac{1}{2} - \frac{3}{4}$	加法と 減法	【1年】32分 たしかめ6 計算 (3) $\frac{1}{4} + \left(-\frac{2}{3}\right)$	通 分 小 公 倍 数
	指導の Point	通分の仕方の確認 最小公倍数	指導の Point	通分の仕方の確認 減法を加法に変え、項を並べた式に直す	
2	かけ算 分数の	【6年】62分 ☆11 ① $\frac{2}{3} \times \frac{\square}{\square} = 1$	方 程 式	【1年】101分 たしかめ3 方程式の解法 (1) $\frac{1}{7}x = 2$ (2) $\frac{x}{2} = 5$	逆 数
	指導の Point	$\frac{1}{\square}$ になるためにはどんな数を数をかけるか	指導の Point	x の係数を1にするには係数の逆数をかける	

【算数科・数学における9年間を見通した学習指導のための「Connect 30」】



岩内町を発信・説明するための表現例
 Iwanai is in Hokkaido, Japan. I like Iwanai very much.
 I want to introduce Iwanai to you. It's famous for TARA, and the mascot Taramaru.
 We can go skiing, snowboarding, camping and climbing in the mountains. We can go fishing in the ocean.
 (この他、「外国人観光客とのやり取り・質問・観光案内例」なども作成中。)

【岩内町を世界に発信「英語表現30」】

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 学習規律等を統一することで、乗り入れ指導や授業参観等をスムーズに行うことができています。
- 教科の系統性等を明確にすることで、児童のつまづきに配慮した指導を行うことができています。
- 町内の4校間で、令和7年度の義務教育学校の設立に向け、岩内町を目指す学校像への共通認識を高め、スケジュール感をもって計画的に開校準備業務を推進する必要がある。

発達の段階を踏まえたスタートカリキュラムの編成と実施

中標津町立丸山小学校 学級数 15 (校長 横山 裕 充)

1 丸山小のスタートカリキュラムについて

本校では、就学の入口である第1学年は今後の学校生活を定める重要な時期であると考えている。そのため、児童が幼児期の教育における遊びや生活を基盤として、主体的に自分の思いや考えを表現しながら学びに向かうことができるようにするためのスタートカリキュラムを発達の段階と児童の実態に即して編成し、実施してきた。

2 「子どもが学ぶ」をつくるための研修

スタートカリキュラムを編成・実施するに当たり、読み・書き・計算を身に付けるためのベースや、児童が主体的に学ぶ姿の具体などについて全教職員で研修を行った。

本校には、通常の学級においても読み・書き・計算等に困難さを抱える児童が少なからずいることから、読みのメカニズムや、書くために必要な力、数概念や数の三項関係について理解を図る研修を行った。また、スタートカリキュラムの必要性や、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などを整理することで、幼児教育と小学校教育の指導のつながりを再確認し、教職員の意識の転換を図った。

3 スタートカリキュラムの編成

幼児教育施設への幼児教育施設で行っていた遊びや活動についてのアンケートを実施するとともに、教職員への研修を行った上で編成した本スタートカリキュラムでは、読み・書き・計算の土台となる力を、児童が楽しみながら自然と学んでいくことを大切にしており、次の3点に留意した。

- ・毎日1時間目に「わくわくタイム」を位置付ける
- ・生活科を中心として、各教科等の活動に一貫した流れをもたせる
- ・児童にどのような力を付けさせたいのかを明確に位置付け、週ごとにテーマを設定する

「わくわくタイム」では、読み・書き・計算、体、集団づくりの3つの分野に整理し、児童が幼児教育施設で体験した歌や、遊び、読み聞かせ、体づくりや言葉遊び、数遊びなどを通して、体験的に読み・書き、計算の土台となる力を身に付けられるようにした。そして、「わくわくタイム」での学びを各教科等の学習にも取り入れるなど、密接な関連を図るようにした。

4 考察と今後の課題

右の表は、令和元年度の「ほっかいどうチャレンジテスト」を使って、国語と算数の平均正答数、平均誤答数を、本スタートカリキュラムを実施した令和2年度第1学年と本スタートカリキュラム以前の令和元年度第1学年、全道平均と比較した表である。特に、各設問において、国語では、問4（促音）、問6・7（拗音）の部分で、令和元年度第1学年及び全道平均を大きく上回った。

	平均正答数	平均誤答数
R2年度第1学年	9.3	0.7
R元年度第1学年	8.0	1.9
全道平均	8.1	1.7

手拍子で、モーラ数を確かめながら回答する児童の様子が見られるなど「わくわくタイム」で取り組んだ、音韻認識を意識した言葉遊びはもとより、眼球運動や目と手の協応運動に係る活動も効果があったと考えられる。

算数では、問6（何番目）問7・8（足し算の文章問題）で、同じく全道平均を大きく上回った。

特に、文章問題の定着度合いが高い要因は、テーマをもった活動の中で数を意識させる活動として、実際に数を唱えながら言葉で確認したことにより、問題場面を日常と結び付けることがどの児童も容易にできているためだと考えられる。

以上のように、児童の発達の段階を踏まえた本スタートカリキュラムは、児童が幼児期の教育における遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮しながら学習に向かうことができるようになることはもとより、小学校での学習の定着にも一定の成果が見られた。

また、本スタートカリキュラムに基づく取組を効果的に進めるためには、学級担任等が児童の発達の段階や実態を丁寧に見取り、「子どもが学ぶ」ことを常に意識することが重要であると考えられる。